

横澤利昌 先生へ贈る言葉

経営学部教授 大 島 正 克

横澤利昌先生は、2012（平成24）年3月31日をもって、亜細亜大学経営学部を定年退職されます。同年4月1日、亜細亜大学名誉教授になられる予定になっております。ここに謹んで横澤先生へ贈る言葉を述べさせて戴きます。

横澤先生は小生の専門（会計学）とは異なり、マーケティングがご専門の先生です。いつ頃から、経営学部にてご一緒させて戴いているのか、実はすぐに思い出せません。こうしたときに役立つのが、亜細亜大学が毎年新生に配布している『私のプロフィール：先生の紹介』という冊子です。小生は、亜細亜大学に奉職させて戴いて以来、毎年発行されるこの『私のプロフィール』を保存しております。そこで、横澤先生が何年版の『私のプロフィール』から登場されたのか探してみました。1986（昭和61）年度版から、自己紹介の文章とお写真がありました。他の頁をめくってみますと、懐かしい先生方の顔を拝見することができます。現在在職の先生方も皆若い。多くの歳月が過ぎ去っていったことを改めて感じさせられます。横澤先生の頁を拝見しますと横澤利昌教授とあります。1986（昭和61）年版から推察して『私のプロフィール』への掲載の前年の1985（昭和60）年に教授職にて経営学部いらっしゃったこととなります。小生、当時は助教授（現在の准教授）でした。

今、改めて横澤先生の当時の『私のプロフィール』を読み返しております。「人生には、大きな出会いが何度かあるようだ。」という出だしから始まります。小生にとって横澤先生との出会いも、大きな出会いの1つです。「友人、結婚相手、恩師、あるいは書物であったりする。それにより、将来の方向が大きく変わる出会いがある。人生とは、出会いの歴史といえよう。」ここで第一節が終わります。4行足らずの言葉のなかに、横澤先生の人生観が凝縮しているように思われます。これが43歳のときのお言葉であることにも驚かされます。と申しますのは、現在もそのようなのですが、横澤先生から発せられるお言葉は、実に哲学的なのです。含蓄に富んだお言葉なのです。小生などは、最初は、先生のお言葉の意味が解からず、後になって、ああ、あのときのあのお言葉は、そういう意味だったのかと、やっと解かることもしばしばでした。そしてこの状況はその後もずっと続くこととなり、現在に至っております。

その哲学的なご発想とご発言は、先生の『私のプロフィール』を読み進めると明らかになってまいります。先生が学問を志すようになられてから、しばらくして、学問的に悩まれた時期があっ

たそうです。そのときに、大きな出会いがありました。山本安次郎先生との出会いです。山本先生は、横澤先生の『私のプロフィール』によれば、当時既に経営学界の重鎮であり大巨峰でられました。その山本先生が、1977（昭和52）年、南山大学から亜細亜大学に招聘され、大学院博士課程で講座をご担当されるようになったそうです。横澤先生は山本先生のことを以下のように記しておられます。「山本先生は、京都大学で河上肇に師事し、西田幾多郎の講義（哲学概論）を受講したという、現在教壇に立たれている中では貴重な存在である。とにかく諸外国の文献を表面的に紹介する傾向のあるわが国で、先生は、英・米・独・仏などの諸学説を奥深く研究し、さらに戦前からの経営学の伝統を踏まえ、馬場敬治教授など、内外の諸学説を批判的に摂取して、西田哲学を基礎に、独自に構想した経営学を樹立し、自律性を主張される。」とあります。ここまで詳しく記述されますと、いったいこの文章は誰のプロフィールかと思われるほどです。そのくらい横澤先生は山本安次郎先生のことを深く尊敬しておられたことが解かります。その山本先生との一体感は、『私のプロフィール』を読み進めますとさらに色濃く出てまいります。

この山本安次郎先生との出会いが、横澤先生の人生に大きな転機となります。この転機における行動がまさしく横澤先生にしかできない行動だったのです。山本先生が亜細亜大学大学院にて博士課程のご指導をされることをお知りになった横澤先生は、修士課程は早稲田大学大学院だったのですが、すぐさま博士課程への進学を亜細亜大学大学院の博士課程へと変更され、さらに山本先生のお住まいの近くに転居されたのです。「さっそく、住まいも転居し、大学院で山本先生と私との二人だけの、禅問答のような対話が、何ヶ月か続いた。その後、私は学問の方法論で、ある光のようなものを見だし開眼する思いであった。山本先生は、机上で論理を組み立てているとばかり思っていたが、接してみても、実務経験もあり、これほどまでに現実の経営を凝視しているのかと、驚かされた。」とあります。小生だったら、横澤先生のような行動がとれたでしょうか。自問するまでもなく、ここまでの行動を取ることでできる学者はほとんどいらっしゃらないと存じます。ここに横澤先生の横澤先生らしさが迸り出ています。文章は続きます。「また機能（過程）とともに、構造も重視され、単に新しい書物を追うだけでなく、文献の新旧よりも、何か本物を見極め、深めるという態度である。すなわち、「経営の論理」により、ドイツ経営経済学とアメリカ経営管理学の両方への批判を行い、真の統一理論を確立するのが、経営学の世界史的使命であると主張される。」最近の横澤先生の『私のプロフィール』には、このような文章はなく、書き直されたようですが、当時の先生の『私のプロフィール』には、ここでかなり引用させて戴いたような哲学的な記述で溢れておりました。横澤先生の山本先生を通しての学問への情熱に、感銘させられるばかりです。こうした学問への情熱が、横澤先生のライフワークである老舗企業のご研究における2007（平成19）年6月の「NHKスペシャル・長寿企業大国につぼん」および「世界一受けたい授業」の大反響に具現化されたのだと存じます。

先生のご研究の活動は非常に幅が広く、すべてを言い尽くすにはあまりに紙面が狭すぎます

が、小生と関連したことに限定させて述べさせて戴きますと、第1に、日中韓経営管理研究会の設立運営ならびに日中韓が3年ごとの持ち回りにて開催することとなっている当該研究会の日中韓経営管理学会の開催が挙げられます。この研究会と学会大会は、横澤先生のご提案により、日中韓の経営学（ここでいう経営学は広い意味での経営学で、狭義の経営学の他に会計学やマーケティングの分野も含まれます）の研究者が相互にネットワークを組み開始されました。この会議は東アジアの安定的な成長を目的とし、学術面から経営管理の向上に役立つ研究成果の発表の場を提供しています。2004（平成16）年に始まり、第1回は中国、第2回は韓国で開催され、引き続き第3回目の2006（平成18）年の日本での大会は亜細亜大学を会場に開催されました。大変なお仕事ですが、グローバル化が叫ばれている現在、日中韓の国際的な学会大会の開催は、実に大きな意味をもっております。日中韓経営管理研究会の設立運営と日中韓学会大会の開催は、横澤先生の大きなご業績の1つとなっております。

第2に、経営学部3年次前期の専門科目「ホスピタリティビジネス特講」における京王プラザホテルとのコラボレーションによる授業が挙げられます。当該科目は、経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科が誕生する以前に、ホテル観光学講座の一環として、横澤先生が直接、京王プラザホテルと交渉され、スタートすることができた科目です。京王プラザホテル内で実際に働いていらっしゃるスタッフにより、器材までも教室に持ち込んで戴いての授業は、大変人気があり、受講希望者は毎年200名を超えておりますが、全員の受講は不可能で面白半分には受講する学生も少なくはありません。そこで先生は真の受講希望者に限定するために受講希望者に課題をお出しになり、熱心な学生のみ受講を可とするという方法をおとりになりました。こうした受講熱心な学生を篩い分ける方法などは絶妙な授業マネジメントと存じます。毎回の授業後の受講生の授業アンケートを参考に読ませて戴いたことがありましたが、そこには受講生の授業への感想と感動とがびっしり書かれていて、小生も思わずジーンとくる記述に数多く出会いました。小生のゼミ生のみならず亜細亜大学の学生が、京王プラザホテル等、多くのホテルに就職できましたことも、横澤先生のこうした感動的な授業があったからこそと心から御礼申し上げます。誠に有難うございました。

第3に、1989（平成元）年から、現在も続いております「亜細亜大学経営学部トップ・マネジメント特別講義」への多大なご貢献があります。以下、横澤先生がご担当された当時の「トップ・マネジメント特別講義」のテーマと代表的な企業のトップのお名前（お役職等は当時のもの、敬称は略させて戴きます）を挙げさせて戴きます。

- ・1996（平成8）年度「これからの戦略経営」（賀来龍三郎キヤノン（株）会長、清水孝夫（株）モスフードサービス社長他13名）
- ・1997（平成9）年度「企業のグローバル化を求めて」（山口祐司富士屋ホテル（株）副社長、藤村宏幸（株）荏原製作所会長他9名）
- ・1999（平成11）年度「現状打破の経営—変革の意思と行動を求めて—」（間野永光（株）ながの東急百貨店代表取締役社長、溝口文雄横河電機（株）代表取締役副社長他10名）

- ・2000（平成12）年度「顧客満足から顧客価値創造へ」（福原義春（株）資生堂代表取締役会長、桜井正光（株）リコー代表取締役社長他10名）
- ・2001（平成13）年度「顧客価値経営とIT戦略」（西室泰三（株）東芝代表取締役会長、たかの友莉（株）不二ビューティ代表取締役社長他11名）
- ・2002（平成14）年度「トップが語るリーダーシップ」（出井伸之ソニー（株）代表取締役社長、丹羽宇一朗伊藤忠商事（株）代表取締役社長他11名）
- ・2003（平成15）年度「トップが語る更なる挑戦」（葛西敬之東海旅客鉄道（株）代表取締役社長、ジュディ・オング（歌手）（株）ヒーモリ代表取締役社長他11名）

以上、延べ7年間もの長きにわたり、「トップ・マネジメント特別講義」という大変な科目のご担当をお引受賜りましたことに心から御礼申し上げます。当該講義のテーマにしましても、横澤先生の日頃のご研鑽が良く窺えましたし、横澤先生のご尽力により講義にお呼び戴いた講師の方々の素晴らしさにも感動を覚えました。企業のトップの講師の方々のご講義の後、横澤先生が当日の講義のコメントをされます。このコメントがまた横澤先生らしいまさに横澤先生でしかできないコメントでした。スタート当初から「トップ・マネジメント特別講義」は木曜日の4時限目なのですが、4時限目が終わりに近づいて教室がざわついても、何ら気になさることなく坦々と含蓄に富んだコメントをしておられるのが常でした。悠然とコメントされるお姿は誠に、教育者そのものです。このことだけは学生に伝えるのだという情熱が溢れていました。先生の教育に対する真摯な姿勢がそこにありました。横澤先生のコメントを楽しみにしていたのは学生だけではありません。実は、小生も毎回、横澤先生がトップのご講義に対し、どのようにコメントされるのかを密かに楽しみに致しておりました。新たな見方や考え方を伝授して戴くような心持でした。本当に有難うございました。また本当にお疲れ様でした。お蔭様にて、「トップ・マネジメント特別講義」は現在も続いております。のみならず経営学部の代表的な講義として世に知られるようになっております。「トップ・マネジメント特別講義」に対する横澤先生のご貢献の大きさは言葉に言い尽くせないほどです。先生のお嬢様がお勤めの会社の社長にご講義をお願いしたときには、横澤先生のお嬢様も「トップ・マネジメント特別講義」のトップのスタッフの一員として、パワーポイント等を操作するために一緒にいらっしゃいました。まさに一家を挙げてのご協力でした。心より感謝いたします。

これほどの先生を亜細亜大学の先生方にはそのままにはしておきませんでした。2000（平成12）年の6月、横澤先生は亜細亜大学学長選挙に立候補されました。結果は惜しくも第2位にて落選ということになりましたが、横澤先生に対する支持者が数多くいらっしゃったことも判明致しました。この学長選挙にて、小生は推薦責任者をやらせて戴きましたが、小生の力が至らなかったばかりに、このような結果となり本当に申し訳なく存じております。ご協力賜りました皆様には心より御礼申し上げます。横澤先生が学長に当選されていたならば、亜細亜大学はまた違った現在を迎えていたに違いありません。落選とはいえ、この第2位という実績は燦然と輝い

ております。その後、先生によります先の日中韓経営管理学会の開催などへの国際的展開は、エネルギーを学内ではなく、国際的に向けられた証かと存じます。

また、いつの頃からか忘れてましたが、横澤先生は長年亜細亜大学の教職員会の会長を務めておられます。新年での我々の初めての挨拶は、学長でもなく理事長でもなく、教職員会開催の新年会での横澤教職員会会長の「新年おめでとうございます」から始まります。実はこのときも横澤先生流の哲学的な言葉が随所に出てまいります。その含蓄に富む言葉から新年が始まるのです。それが2012(平成24)年の新年会で最後になるかと思いきや大変残念でなりません。残念ではありますが、横澤先生の会長としての最後の新年のご挨拶が、どのような内容になるのかと今から楽しみでなりません。

最後に、ご定年をお迎えになる2011(平成23)年度の先生の研究室の様子をご紹介させて戴きます。横澤先生はご定年が近づきましても、ご多忙でいらっしゃり、10月も日中韓経営管理学会の中国大会のことで飛び回っておられました。例によって先生の研究室の机の上は書類や書籍で山積みです。いつも山積みです。実は小生もそうです。何かこのように研究室が雑然としているのを見ますと、同類である小生などは安堵の気持ちになります。先生がご退職されると研究室が雑然としている仲間が減ったようでなぜか寂しい思いで一杯です。

定年退職によるご退職とはいえ、多大なご業績を残された先生が去られることは経営学部そして亜細亜大学にとりまして計り知れない損失であり、大変残念なことです。残された私達は横澤先生の教育と研究と国際的なネットワークの構築に関する情熱と実行力をしっかり脳裏に刻み込んでおかなければなりません。横澤先生が去られてしまうというこの場に及んで、横澤先生のこれまでのご業績を今後の私達の心の拠り所とし、私達一人ひとりが教育と研究と国際的ネットワーク構築を通して経営学部さらには亜細亜大学の発展に尽力しなければならない、という決意を改めて致しました。

横澤先生は、大変なスポーツマンでいらっしゃいます。若き日には、卓球でインターハイに出場されたほどの腕前でした。テニスを始められてからもかなりのキャリアを積んでおられるので、相当な腕前と伺っております。さらに最近では年齢別の卓球大会にて2位に入賞されたとも伺っております。このような素晴らしい先生と亜細亜大学ならびに亜細亜大学経営学部という職場を共にすることができたという誇りを胸に、残された我々はさらに前進することをお誓い申し上げ、贈る言葉とさせて戴きたく存じます。

横澤利昌先生、長い間本当に有難うございました。これからの先生の益々のご活躍とご健勝を心から祈念致しております。

(平成23年12月吉日)